

北海道苫前町の風力発電施設「苫前グリーンヒルwindパーク」で5日発生した風車落下事故で、経済産業省が「重大事故」と認定したことが同省への取材で分かった。同省は有識者会議の専門部会に、発電事業者「ユーラスエナジー苫前」が提出する調査結果報告書を諮り、原因特定と再発防止策の検討などを進める。ユーラス苫前は12日、専門家らでつくる事故調査委員会を設立、14日から現地で大規模調査する。

事業者「きょうから本格調査」

北海道苫前町の風力発電施設「苫前グリーンヒルwindパーク」で5日発生した風車落下事故で、経済産業省が「重大事故」と認定したことが同省への取材で分かった。同省は有識者会議の専門部会に、発電事業者「ユーラスエナジー苫前」が提出する調査結果報告書を諮り、原因特定と再発防止策の検討などを進める。ユーラス苫前は12日、専門家らでつくる事故調査委員会を設立、14日から現地で大規模調査する。

時45分ごろ発生。強化プラスチック製の羽根3枚と、羽根の根元をつなぐローター（高さ約45メートル）が同時に落下したとみられ、ローターが羽根に付いたままだった。当時は風速10メートル程度で、通常なら発電できる強さという。ユーラスHDは支柱とローターの接続部分に何らかの異常があったとみて原因を調べる。

同省によると、羽根の落下事故は今年に入り、3月に太鼓山風力発電所（京都府）、4月に「windパーク」で相次いで発生。昨年まで国内では例がなく、同省は2件を「重大事故」と認定した。苫前の事故は3例目となる。

落下原因に関し、太鼓山を所有する京都府は「金属疲労」、笠取を運営する中部電力の子会社「シーテック」（名古屋）は「一部品の強度不足」の可能性が高いとし、5月に同省有識者会議の専門部会で報告した。同省は苫前事故でも、先行2

流が金属疲労を助長した。山間地に多く設置されている全国の風車に共通する問題だ。対策を講じなければ、同様の落下事故が続く可能性がある。事業者は風の特徴を把握し、不規則な風の場合は発電を止める必要がある。

車の立地環境の違いなどから、事故3件の関連性は低いのではないかと、苫前町の落下も、メンテナンスの不備や問題のある素材の使用など、固有の原因の可能性がある。ただ国内で初期に設置された風車は耐用年数を迎えている。事業者間でトラブルや対応策について情報を共有し、メンテナンス技術を高める必要がある。



事業者の親会社で風力発電国内最大手の「ユーラスエナジー」と、事故は5日午前4時45分ごろ発生。強化プラスチック製の羽根3枚と、羽根の根元をつなぐローター（高さ約45メートル）が同時に落下したとみられ、ローターが羽根に付いたままだった。当時は風速10メートル程度で、通常なら発電できる強さという。ユーラスHDは支柱とローターの接続部分に何らかの異常があったとみて原因を調べる。

「乱流」劣化早めた
内田孝紀・九州大応用力学研究所准教授（風工学）の話「乱流」と呼ばれる不規則な風の変化が風車にダメージを与え、機器類の劣化を早めたのではないかと。太鼓山の事故も乱

苫前グリーンヒルwindパーク
風力発電国内最大手「ユーラスエナジーホールディングス」（東京）の子会社が1999年11月、北海道苫前町で運用開始。国内初の大規模風力発電所で各地のモデルとなった。デンマークのポナス社（現シーメンス社）製風車20基（出力計2万キロワット、耐用年数20年）を牧場に設置。一般家庭約1万世帯の消費電力に相当する年間3680万キロワット時を発電し、全量を北海道電力に売電している。

メンテ技術高めよ
荒川忠一・東大大学院工学系研究科教授（機械工学）の話 風